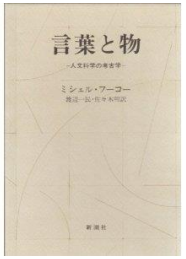
知の枠組



ミシェル・フーコー

世界観の変化を、進歩・発展に見るのではなく、時代ごとの知の枠組があるという見方で扱う。

ルネサンス期
ベラスケス（1599-1660）の『侍女たち（ラス・メニーナス）』の分析。
自分はいったい誰の視点でこの絵を見ているんだろうか、とおもう。王様の視点からこの絵を見ている。
王様は絵画の外にいる。王様の時代の不可視の権力を見る。

1500年代
類似を見出し、関係づけて、注釈する。大宇宙と小宇宙（人間）の照応がその代表。
知性そのものが、科学精神よりも散文精神に傾いていた時代。

1600年代～1800年代の古典時代
知性は、物と記号の対応で世界をとらえて、記号を用いて表象することを中心に展開する。ライプニッツの代数。物に名前をつけ、言葉を体系化（差異、概念化、関係、分類、階層化）した百科全書や博物学の発展。

（1600年代後半、ニュートンの時代、教会権力に対して、世界観が変わっていく。）

近代
紙幣の導入：1715年頃　ジョン・ロー、フランス政府の財政再建時。契約、とりきめ、ルールに依拠。
　　物質との関係を絶ち、交換価値にもとづくものになった。
物の価値もまた、物に内在するものとして見るのではなく、
売れ（＝交換され）た後に、事後的に見出されるものとして考える見方が生まれた。
もはや商品も、労働も、すべて交換体系のなかに位置づけられる。

それはまるで言語観の変化のようだ。言語論的転換のプロセスとして扱われる。
言語を、言葉と物の関係でとらえるのではなく、むしろ、語（シニフィアン）と語釈（シニフィエ）の関係でとらえる。こうして言語学は交換の体系の象徴になり、さらには近代的思考のエッセンスになる。

著者は、これをさらに進めて、
科学の発展が、人間中心の思考　ヒューマニズム　人文科学の時代を終わらせる、と考え、現代の知を、<人間の死>　ととらえる。

http://www.amazon.co.jp/%E8%A8%80%E8%91%89%E3%81%A8%E7%89%A9%E2%80%95%E4%BA%BA%E6%96%87%E7%A7%91%E5%AD%A6%E3%81%AE%E8%80%83%E5%8F%A4%E5%AD%A6-%E3%83%9F%E3%82%B7%E3%82%A7%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%95%E3%83%BC%E3%82%B3%E3%83%BC/dp/410506701X